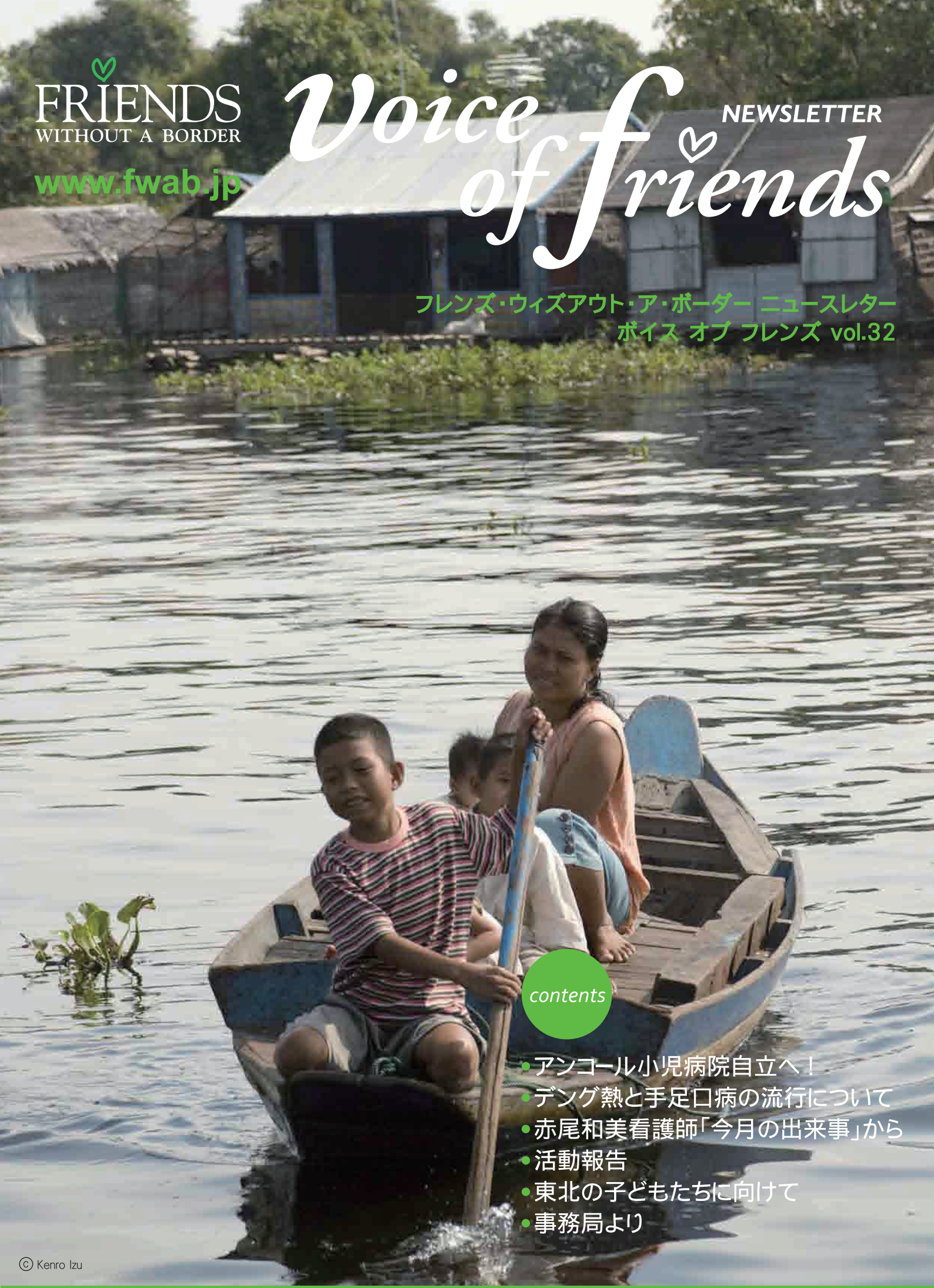
FRIENDS
WITHOUT A BORDER

www.fwab.jp

Voice of friends

NEWSLETTER

フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー ニュースレター
ボイス オブ フレンズ vol.32



contents

- アンコール小児病院自立へ！
- デング熱と手足口病の流行について
- 赤尾和美看護師「今月の出来事」から
- 活動報告
- 東北の子どもたちに向けて
- 事務局より

© Kenro Izu

2012年 秋・冬号　認定NPO法人フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPAN

アンコール小児病院の自立達成！そして今後の計画

1997年11月、カンボジア・シェムリアップにおいてアンコール小児病院建設の鍬入れ式を行なってから15年の歳月が流れました。

病院開院から13年あまり、その間のべ100万人を越える子供たちの診療にあたってきました。

当初からの目標は、いつの日かアンコール小児病院が私たちフレンズの手を離れて、自立して歩き始めて欲しいということでした。

当初は2007年を自立の目標としていましたが、目前の2006年、予定していた現地保健省への移譲計画が現実的ではないことが明らかになりました。

また、観光産業の急発展に伴い、病院用地の継続使用について懐疑的な情報が現地で流れたのもその頃でした。

幸いカンボジア政府と交渉した結果、病院用地の継続使用権の延長を50年間獲得することができました。しかしその時も、フレンズが運営を担い続けながら、いつ、どのような形で自立できるのだろうかと想いを巡らせたものでした。

医療に限って言えば、その数年前からすでに、カンボジア人医師、看護師たちスタッフのケアの質においては自立を考えるのに充分なレベルに到達していると評価されていました。しかし病院運営では、医療プラス病院全体の管理・統率や経理、そして何より、非営利病院の宿命である運営資金の獲得が必須で、それらを考慮すると自立への道のりは、まだ長いものに思えたのです。

私もシェムリアップ訪問のたびに現地スタッフの幹部を集めては、自立、現地化への彼らのビジョンを共に話し合う場を作って、共に真剣に考えてきました。

2011年6月、病院幹部の連名でフレンズUSAに現地化自立プランの草案が届きました。現地発の待望の自立への第一歩が踏み出されたのです。

草案からは、自立化問題への彼らなりの苦悩とその解決策、そして今後への大きな意気込みが読み取れました。

草案のいくつかの問題点解決と疑問点の相互理解のためにフレンズ理事幹部会がシェムリアップを3度訪問し、現地スタッフと、彼らが確保した支援者の方々も加えて会議を重ねたのは、その夏から秋にかけてでした。

2012年1月に恒例の開院記念式典のためにフレンズJAPANとUSAの理事方々がシェムリアップを訪れた際、病院幹部とともに現地化プランの最終案に合意しました。

現地化達成目標は2013年1月。そのための条件として次の4つをアンコール小児病院幹部会に提示しました。

1）国際的に通用する経理システムとその監査
2）医療レベル向上と問題解決のための医療監査機構の設立
3）病院内の運営機構の充実
4）運営資金（ドナー）の確保

これらの条件は、これまで築いてきたアンコール小児病院の高い医療レベル維持と『思いやりのある医療』を継続するため、そして国際的に信頼されるNGOであるためには不可欠の要素です。

今年9月末、病院自立委員会とフレンズとの最終会談の結果、上記項目の達成を検討した上で最終的な自立認可をくだしました。自立後は、アンコール小児病院内に本部を置くインターナショナルNGO『Angkor Hospital for Children International（仮称）』がアンコール小児病院運営母体となります。

その構成理事9名はカンボジア、香港など現地環境に即したアジア地域から多数選ばれ、フレンズUSAから井津建郎、フレンズJAPANからは松島彰雄が理事として参加し、アンコール小児病院とフレンズ間の橋渡し役、また監査役として関与する予定です。

2013年以降もフレンズは継続して部分的支援をアンコール小児病院へ続けますが、すべての運営決定はアンコール小児病院内において行われるようになり、待ち望んでいた自立、現地化が達成されます。

私がアンコールワット写真撮影のために訪れたのがほぼ20年前。その時には夢のような非営利小児病院の建設と14年にわたる健全な運営が実現できたのも、日本をはじめ世界の善意に満ちた支援者の皆様のおかげと深く感謝いたします。

そしてその愛と友情のシンボルであるアンコール小児病院の現地化、自立達成がとうとう目前となりました。

この間、アンコール小児病院運営を通じて得ることができた知識と経験はフレンズの大きな財産です。

アジアを旅して辺りを見回すとカンボジアのみならず、アジアには恵まれない子供たちが失わなくてもよい命をむざむざと落としているのが悲しい現状です。

アンコール小児病院がフレンズの手を離れようとしている今、**フレンズが蓄えたその経験と知識を他のアジア諸国でも活かせないか、またそれこそが長年にわたってご支援をいただいた方々への感謝の形でもあるのではないかと考えました。**

ラオスの子どもたち ルアンパバーンにて

フレンズ内での話し合いと現地調査の結果、隣国ラオスの古都、ルアンパバーン が新規プロジェクトの有力候補として挙がったのが昨年秋でした。

今年始めから数度にわたり現地を訪れて現地保健省や州立、郡立病院、現地で活動するNGOから得た情報と彼らと話し合った結果、以下の企画草案ができました。

ルアンパバーン州立病院敷地内に小児科病棟をフレンズが建設、10年間の期間限定で現地スタッフの教育と医療レベルの向上、地域医療と衛生教育の支援をする。

アンコール小児病院の3つの基本理念でもあった、**1) 医療教育、2) 診療、3) 地域における衛生予防教育。**これを今後もフレンズの遂行プロジェクトの柱として、**東南アジア諸国において現地で運営を維持しつつ、継続性のある小児医療のモデルケースを作る計画**です。

これは2010年にフレンズが建設開院し、その効果が高く評価されているカンボジア・ソトニコム郡立病院内の小児科病棟、「アンコール小児病院サテライト・クリニック」の経験からさらに発展させる計画とも言えます。

アンコール小児病院のような独立した病院ではコストが膨張しやすく、結果的に現地化が難しくなり、また政府運営の病院との競合による弊害もあったこと。それに比べてサテライト形式は限定期間後、当該病院の一部として容易に現地に帰属でき、施設・機材・人材の共有が可能なため設立・運営コストが少なくおさまります。さらにフレンズが運営する小児科のみならず、その影響により病院全体の改善も期待できます。

患者さんを数多く診療する事は最重要ですが、フレンズのような小さなNGO としては限界があります。

病院で数多くの患者さんを診療しながら、現地スタッフの教育を行い、地域の衛生・予防教育を通じて中央病院とのネットワークを築く。アジアの医療現場で大きな評価を得ることのできたモデルケースが、私たちの育て上げたアンコール小児病院と自負しています。

この理念をもとに、更に調査と計画を充実して、2013年度内にはルアンパバーン州立病院に『ラオス・チャイルド・クリニック(仮)』の計画をスタートさせるべく、スタッフ一同はりきっています。みなさまもカンボジアに引き続いてご支援くださるようにお願い申し上げます。

古代遺跡写真家の私がちょうどアンコール小児病院建設鍬入れの頃に訪れて撮影したのがルアンパバーンの仏教遺跡でした。その時、穏やかな美しい町に好意を持ったこの土地に、しかし医療状況と貧困さにおいては、カンボジアと同様に低いレベルのこの国の子供たちが、安心して健康を託せる病院を作り『全ての患者を自分の子供と同じように診療する施設』を展開できることは、再び燃えあがった私の、いや現在はフレンズ一同の、そしてその支援をいただく方々全ての夢として共に遂行して行きたい夢です。

フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー創設者
2012年10月　井津建郎

アンコール小児病院ピエクトラ副院長が来局

8月23日、アンコール小児病院(AHC)のピエクトラ副院長が当事務局を訪問しました。AHCでのカンボジア人リーダーであるピエクトラ副院長は、2011年5月に医療部長から現職へと役職を変え、これからのAHCを牽引するキーパーソンとして期待されています。過去に来日経験はありましたが、事務局訪問は初めて。今回の来局は、日頃の日本からの支援について直接、感謝を伝えたいということと、AHC自立へ向けての進捗報告が目的です。

ピエクトラ副院長からまず語られたのは、日本からの支援がどれだけ大きな助けになっているか、カンボジア人スタッフたちが、日本の支援者のみなさまにどれだけの感謝と親しみを抱いているか、ということでした。AHCスタッフ一同がそのように思っているのだということを、ぜひとも支援者のみなさまに伝えてほしいと依頼されましたので、代わって感謝申し上げます。あたたかいご支援を、いつもありがとうございます。

現在AHCでは、来年1月の自立に向けて院内に委員会が設置され、着々と準備が進められています。

自立が決まってからというもの、スタッフそれぞれが自覚と自信、誇りを新たにし、前向きに各自の仕事にあたっているとの報告を受け、JAPANスタッフにも喜びが広がったことは言うまでもありません。

AHC自立後もフレンズは規模を縮小して支援を続け、AHCを見守ってまいりますので、今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

地域的に水がなかなか手に入らない場所はとてもたくさんあります。水がない生活を想像してみてください。たかが水、されど水です。

訪問看護のHちゃんの家族は、往復４キロを歩いて、1日60リットルのお水を井戸のある村長さんのところから運んでいます。1度に30リットルしか運ぶことができず、これを２度繰り返すのです。それでも、７人家族にとって60リットルはあっという間です。節約のために、この暑い季節でも数日に1度しか水浴びができません。

この地域では、井戸を掘るにも大きな重機を使って、何日もかけて50～60メートルも掘り下げないと水源がありません。通常の約10倍の経費もかかってしまいます。

何度も水浴びしちゃう～!

この時にも1日目で30m、2日目で40m掘り下げてもドロドロのお水が微々たるものでした。60mまで掘ってもきれいな水が出なければ、また場所を変えて最初から始めなければなりません。井戸堀りをしているNPOの職員さんと頻繁に連絡を取り、「まだ…」という返事にがっくりすること数日。そして、やっと、「出ました～！」という知らせにスタッフ一同大喜びでした。

早速、井戸の様子を見に行かなければ･･･と行ってみると、ご覧のように満面の笑顔で、水浴び放題です。今戻って来たと思ったら、「もう１度行ってくる！」と飛び出して「水がいっぱいだよ！！」と、とにかく嬉しそうでした。この井戸堀りのご支援をいただいている井上国際交流財団の皆様に心より感謝を申し上げます。ありがとうございます。　（3月）

ANGKOR HOSPITAL FOR CHILDREN

赤尾和美看護師の「今月の出来事」から

TちゃんとOちゃんは兄弟で、７年間AHCへ通っています。訪問看護を始めて５年になりますが、服用中のお薬もきちんと責任を持ってコントロールできるようになったし、お父さんもお母さんも地道に頑張っています。

生活は楽ではないけれど、モチベーションをもって生活していることが伝わってきます。そろそろ訪問看護からも卒業か…とスタッフで話していました。

訪問看護から卒業するには、身体的な状態だけではなく、環境や経済状態など安心して生活する場があることを確認して終了となります。この日、Tちゃん、Oちゃん宅でその最終チェックをしました。

緊張していますが、カメラを構える前まではニッコニコでした

雨季には強風とスコールで家の傷みが進みます。TちゃんとOちゃんのお宅も雨季に入って随分と壁がやられてしまっています。ニャン子の警備付きですが…ちょっと心もとないですよね。雨が吹き込んでしまうだろうし、安心して眠れるかどうかはかなり疑問です。

お母さんは、「家は以前から修繕をしたいと思っているけど、なかなか十分な資金がたまらない」と言っています。お父さんは大工さんで、材料さえあれば工賃はかからないのですが…このままの状態では訪問看護卒業は不安です。

そこで、修繕にかかる費用の概算を出し、家族でいくらなら修繕の負担をすることができるかをお父さんと話し合ってもらうことになりました。相談の結果、40ドルの負担が可能。そして修繕にかかる費用は、合計250ドル。

そこで、病院が210ドルの負担をして、家の修繕をしました！お父さんの腕前は、匠の技！たった１日で仕上げてしまいました。「これで安心して眠れる！」と喜んでいました。安心して眠れる環境って、とっても大事だと思います。ニャン子の警備さんのお仕事は無くなってしまったけど、今度は、家の中でネズミさんの警備に当たってもらいましょうね。ここ数日は夜間のスコールがすごく、目が覚めるほどです。その前に修繕することができて、本当に良かった！　（7月）

デング熱と手足口病が大流行

外来には連日患者さんが列をなしていました

2007年にデング熱が大流行したことを覚えていらっしゃいますか？あまりの患者数増加に、院内の受け入れ態勢から運営費用に至るまでがてんてこ舞いになり、みなさまにもよりいっそうのご支援をお願いしたりと、開院以来のピンチとも呼べる状況に陥った出来事でした。

あれから5年たった今年、デング熱大流行の再来です！雨期が始まってから広域で流行することが多いデング熱ですが、今年は雨期前からその兆候が現れ、雨期に入った6月には前月比400%増の患者数を記録。毎日、終わりがこないのではないかと思えるほどの来院があったようです。

時を同じくして“原因不明”の病気も大流行。何かわからない病気で多くの子どもたちが命を落としているとの情報が流れ、国が調査に乗り出すほどの問題に発展しました。結果、この病気は手足口病の重症例であることが判明したものの、流行を止める手だてはなく、2つの病気の猛威で、とにもかくにも院内は大わらわな状況でした。

しかし、経験がものをいうとは、まさにこのこと。2007年の経験があったおかげで、AHCではデング熱流行などの患者数急増に対する受け入れ態勢ができており、今回は、冷静に受け止めることができたと報告を受けています。

急きょ、廊下にもベッドが並べられたり、教育センターの教室が病室になり、それに代わってフレンズ・センターの一部を教室にしたりと、臨機応変に対応。院内感染を防ぐための消毒作業含め、スタッフが一丸となって、チーム力で今回のデング熱&手足口病旋風を乗り切りました。ただ、ピークは越えましたが、9月の時点で、デング熱、手足口病での入院がまだ全体の約30%ほどを占めており、通常通りに戻るにはもう少し時間がかかるかもしれません。

支援者のみなさまにもご心配をおかけしました。また、この出来事をきっかけにAHCスタッフの成長の一端をお伝えすることができ、嬉しく思います。みなさまのお力により、AHCはたくましく成長しております！

今年のマンゴーは美味しいです!日本のように1年中お店に並ぶのとは違い、一般家庭の木になるのが普通。ですからこの時期には、どこの家でもたくさんのマンゴーがなります。今年は小ぶりですが豊作。私の部屋には今、30～40個のいろんな種類のマンゴーがゴロゴロしています。毎日最低6個は食べて、満足～！
ドライマンゴーもたくさん作ります。ミキサーでドロドロにして、煮込んで、お皿やトレーに薄く延ばして、こんな風に天日干しを数日。時々不意の大雨が降ってきたりすると、外出中の大家さんから「マンゴー、しまっておいて～！」とSOSコールがあるんですよ。

ICUで呼吸器をつけるBちゃん（左）と退院時のBちゃん（右）

手足口病でAHCへ来たBちゃんのお話です。

Bちゃんはシェムリアップから約200キロ離れた村に住んでいます。ある日、突然の高熱が発生し、デング熱を心配したご両親は近くの病院へ連れて行きました。血液検査の結果は確定的なものではなく、そのまま入院し、症状軽減のための点滴、内服薬の投与が始められました。しかし、症状は悪化。熱がさらに上昇し始めたときに、その病院の医師から「これは最近流行っている手足口病かもしれない。シェムリアップの小児科へ行った方がよい」と言われました。多くの命を奪っている手足口病の治療をする自信はなかったのでしょう。

Bちゃんのご両親はすでにAHCをよく知っていたので、迷いはありませんでした。すぐにAHCへ向かい、その途中Bちゃんの手足には発疹が発現してきたそうです。7月7日14時にAHCの救急外来に到着し、素早い対応で手足口病の診断が下され、一般入院病棟へ。しかし、Bちゃんの症状は夜にかけて悪化し、ICUで呼吸器装着のもと、管理をすることになりました。弱ってきている心臓の治療も加えられ、容態は徐々に回復して重症管理は必要なくなり、7月15日には一般病棟へ。そして17日には無事に退院となりました。

Bちゃんのお母さんは、手足口病は、家族の注意と素早い対応、適切な治療で回復する病気であることを多くの人に知ってもらいたいと言っていました。それにしても良かったですね。（5月）

赤尾看護師参加トークイベント　豊橋

6月30日、豊橋で世界の子どもたちへの教育・医療資金の援助を目的として活動するボランティアグループ「スマイルATG」のチャリティコンサートイベントが開催され、赤尾和美看護師が講演を行いました。お招きいただいたスマイルATG様、当日ご参加いただきましたみなさまに心よりお礼申し上げます。

写真展『アンコールの空の下』 日本アセアンセンター

7月9日〜7月16日まで、国際機関 日本アセアンセンターで写真展を行いました。今回は、スナーダイ・クマエ孤児院の絵画展と同時開催。スナーダイ・クマエ孤児院はAHCと同じシェムリアップにあり、代表を務めるのが日本人ということもあって、AHCや赤尾看護師とは日頃から親しい間柄です。会期中の7月13日には、スナーダイ・クマエ孤児院代表のメアス博子さんと、AHCとスナーダイ・クマエ孤児院の両者を古くから支援してくださっている写真家・足立君江さんとのトークイベントも開催。立ち見が出るほどたくさんの方にお越しいただきました。

こどものいのちをまもりたいフェスタ Ⅱ

8月28日、29日に横浜赤れんが倉庫で行われた『こどものいのちをまもりたいフェスタ Ⅱ』に参加しました。イラクなどで難民医療支援を行っている「医療法人社団スマイル スマイルこどもクリニック」さんが主催したもので、同じくイラクで医療支援活動を行っている共催の「NPO・JIM-NET」さんからお誘いを受け、参加の機会に恵まれたものです。フェスタは、来日中のイラクの子どもたちとの交流イベントや、小児救命講習、ピアノとバイオリンの演奏会など、盛りだくさんの内容。アジアで小児医療を行う団体として共に参加できたことを光栄に思います。

K・MoPAチャリティ・ライブ2012

AHC開院以来、毎年開催していただいている清里フォトアートミュージアム（K・MoPA）の『アンコール小児病院支援チャリティイベント』が、今年も9月17日に行われました。病院開院当時から、毎年趣向を変え、しかも、いつも素晴らしいイベントを開催してくださいます。今年は、朗読家・おつきゆきえさんによる宮沢賢治作品の朗読会。“声”だけで、まるで物語世界が目の前に広がっているかのような感覚を起こさせる朗読の奥深さに、すっかり魅了させられました。K・MoPAのみなさま、ご参加いただいたみなさまに感謝申し上げます。

写真提供：
清里フォトアートミュージアム

上：
グローバルフェスタのフレンズブース

右：
三根中学校を訪問した永野

グローバルフェスタJAPAN 2012

「国際協力の日」に合わせて毎年開催されるグローバルフェスタが10月6日、7日に行われました。今年のテーマは“Think Global,Think Green 世界を変えよう。未来をつくろう。”会場となった日比谷公園では『第29回全国都市緑化フェアTOKYO』も同時開催され、いつもとは違った雰囲気があったのも一興でした。2日目は雨に降られ、どうなることかと心配もありましたが、2日間で10万人の来場者があったそうです。フレンズJAPANのブースでは、蚊帳を張ったり、カンボジアでよく行われている伝統医療の道具を展示したりと、これまでとは違うブース作りにチャレンジしてみました。

よこはま国際フェスタ2012

10月20日、21日は、象の鼻パークで開催されたよこはま国際フェスタに出展しました。両日とも好天に恵まれ、過去最高5万6000人の来場があったとのこと。フレンズJAPANのブースは海の真ん前で、遊覧船の発着を眺めながら、気持ちよく過ごせた2日間でした。このフェスタの目玉は、子どもたちにボランティア体験をさせることです。フレンズブースでも、合計10人の子どもたちがボランティアとして活躍してくれました。カメラ、AD、司会等スタッフ全員が小学生の“子ども放送局”の取材もあり、日比谷とは違った趣の国際フェスタです。国際フェスタは敷居が高いとお考えの方は、ぜひ来年、こちらへどうぞ。

佐賀県みやき町立三根中学校　生徒会募金

佐賀県みやき町立三根中学校では、生徒会活動として10年以上前からアンコール小児病院への募金活動を続けてくださっています。卒業と入学で生徒さんたちが入れ替わり、異動により先生方の顔ぶれも変わるのですが、生徒会の活動として、きちんと引き継がれているとのこと。毎年変わらず募金活動を行っていただくことに、ただただ感謝です。その気持ちをどうしてもお伝えしたいと、9月19日、感謝状を携えてスタッフの永野が学校を訪問しました。募金活動、いつもありがとうございます。

支援者紹介

支援者紹介／森を再生させる会

フレンズJAPANでは、常時“運搬協力ボランティア”を募集しています。これは、カンボジアへ渡航予定のある方に、行程の合間にAHCのフレンズ・センターまで支援物資を届けていただく、というボランティアです。

カンボジアの輸送事情は日本と異なり、利用するにはもう少し制度の熟成が必要かと思われます。また、まとめた物資をコンテナ輸送する方法もありますが、金額はじめ様々な問題によりこちらも利用が難しく、運搬に関しては、ボランティアさんのご厚意に頼っているのが現状です。

この運搬ボランティアに、何年にも渡ってご協力いただいているグループがあります。“森を再生させる会”のみなさまです。代表の渡辺恵司さんが個人で始めたカンボジア支援活動がクチコミで広がり、活動を手伝いたい、支援したいという人たちがいつの間にか集まって、団体活動になったのだといいます。学校建設や絵本出版への支援、子ども服支援などを13年前から行っており、毎年、支援先の学校見学やカンボジアの現状を視察するツアーを実施。そのたびに、ツアー参加者のみなさま全員で、荷物を運んでくださっています。

“森を再生させる会”という名称は、最初の支援活動が植林だったことに由来しているのだとか。しかし、渡辺さんがカンボジア支援を志した20数年前からやりたかったのは、子どものための支援。「人材の森を育てよう」という目標が、支援活動の根っこになっています。

フレンズを知ったのは、同会での活動と並行してフレンズでも支援活動をしていた平岩町子さんと渡邊信子さんからの紹介でした。AHCの活動を、渡辺さんいわく「お世辞ではなく、世界に向けて自慢できる、本当に素晴らしいもの」と思ってくださったそうです（ありがとうございます！）。

渡辺さんの今後の目標は、カンボジアの小学校で、日本式の運動会を実施すること。運動会の教育効果や、家族を交えて楽しめる行事であることを現場の教師たちに説いているものの、体育という概念の欠如、気候、校庭の状態等々、実施を阻む問題は少なくないそうです。

子どもたちのために、という思いを強くお持ちの渡辺さんからは、フレンズJAPANの活動に、いつもエールを送っていただいています。森を再生させる会に負けないよう、私たちも頑張ります！

上：AHCを訪問する森を再生させる会
右：渡辺恵司さん

ご支援について

アジアの子どもたちを支援するフレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPANにみなさまのご協力をお願いいたします。

ご支援の方法をお選びいただけます。

● 一般賛助会員 ： 年会費１口6,000円
● 学生賛助会員 ： 年会費１口3,000円

・口数はご自由です。
・賛助会員のみなさまには年２回発行のニュースレターをお送りするほか、報告会やイベントの案内などをお届けします。

● 一般寄付

・金額・回数はご自由です。
・ニュースレターや報告会、イベントの案内などをお送りします。

● 正会員 ： 年会費１口12,000円

・ニュースレターや報告会、イベントの案内などをお送りするほか、年１回の定時総会において、団体の意思決定について参加していただけます。（委任状の提出も可能です）
※当法人が定める入会申込書を別途ご提出ください。

ご寄付を希望される方には、専用の郵便口座の振込用紙をお送りしております。ホームページのフォーム、もしくはお電話でご請求ください。郵便局や銀行に備え付けの用紙を使っていただいてもかまいません。

● 郵便口座

加入者名：
特定非営利活動法人フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPAN
振替番号：00160―0―546217

● 銀行口座

銀行名：**三菱東京UFJ銀行 中目黒支店**
口座番号：**普通預金 0420041**
口座名：**トクヒ）フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダージャパン**

● クレジット決済

ご自宅からインターネットを通じ、クレジットカードでご寄付ができます。フレンズJAPANのホームページwww.fwab.jpにアクセスし、「オンライン寄付」から手順に沿ってお手続きください。

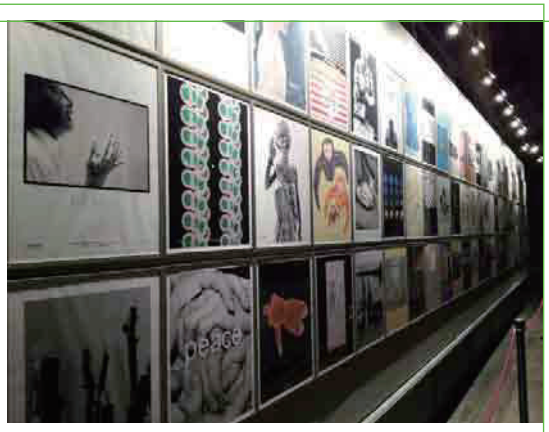
※ご寄付には寄付金控除の可能な領収証を発行いたします。

※銀行からのお振込みや、ご自身の郵便口座より郵便振替で直接送金される場合、お手数ですが必ず、お名前、郵便番号、ご住所をお知らせください。

※アンコール小児病院（カンボジア）に限定したご支援をご希望される方は、その旨を事務局までお知らせください。
（振込用紙使用の場合は“カンボジア寄付”とご記入ください）

※アンコール小児病院に設置するネームプレートは、2012年のご寄付をもって終了いたします。

東北の子どもたちに向けて



今年5月にニューヨークで開催されたピースアート展

東日本大震災後、フレンズJAPANは、震災への後方支援団体として、微力ながら支援を続けてまいりました。「アジアの子どもたちの幸せを願う団体として何かしたい」「災害支援に関しては経験がない」「アンコール小児病院の活動に支障があってはいけない」「海外から、フレンズJAPANが支援の窓口になってほしいとの要望がある」等々、様々な思いや状況を踏まえて検討し、後方支援に徹することを決意。支援したいとの申し出があった方に信頼できる支援団体を紹介したり、当事務局に届いた義援金を、これもまた信頼できる団体へと寄付したり、地道に支援活動を継続しております。

一方、フレンズUSAでは、日本の東北支援を目的としたイベント“ピースアート”を開催し、そこでの収益を、アートを通したメンタルケアを東北各地で実施している“非営利プログラム クレヨンネット”に寄付しました。

これを受け、フレンズJAPANでも初めて、直接的な東北支援イベント“ピースアート”をUSAと同様に開催します（イベント詳細はP8参照）。収益は、イラクの白血病の子ども支援を行いながら、震災後は福島でも子ども支援を行っている“特定非営利活動法人 日本イラク医療支援ネットワーク（JIM-NET）”に寄付する予定です。JIM-NETの福島支援活動は、より放射能の影響を受けやすい小さな子どもたちを対象とした夏休みサマーキャンプ支援、移動保育支援、食の安全プロジェクト支援、医療相談会の実施、子どもにチョコを届けるチョコパーティーの実施など。子どものための支援を行う団体として、これまでもJIM-NETとは協力関係にありましたので、安心して義援金を託すことができます。

震災から1年半以上が経過した今でも被災地の復興は思うように進んでおらず、その状況がもたらす子どもたちへの影響は計り知れません。少しでも子どもたちの力になれるよう、“ピースアート”へのご協力をお願いいたします。

事務局より

アンコール小児病院の自立が決定しました！

本文中でも創設者の井津建郎やAHCの赤尾看護師からご報告しておりますが、アンコール小児病院が、2013年1月、ついに自立する運びとなりました。

AHCの設立にあたり、フレンズは、「10年間で現地の人たちに病院を引き継ぎ、真の“カンボジア人による、カンボジア人のための病院”を目指す」と宣言。しかし、カンボジアの政情を含めクリアできない課題があったため、10年での自立はかないませんでした。

AHCは、今年で開院13年。やっと、これまでの努力が実を結びます。AHCを取り巻く様々な状況が急激に変わったことも、自立に向けて加速度がつく結果となりました。そして何より、これまで支えてくださったみなさまに、心より感謝申し上げます。

自立後、フレンズJAPANは、これまでよりも規模を縮小してAHCの支援を継続します。そして新たに、AHCでの経験を活かしたアジアでの新プロジェクトを発進します。

今後とも、あたたかいご支援・ご協力を、どうぞよろしくお願いいたします。

FRIENDS WITHOUT A BORDER

www.fwab.jp

認定NPO法人
フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPAN
〒153-0064 目黒区下目黒 1-7-5-203
Tel / Fax : 03-6421-7903
friends@fwab.jp

アンコール・フレンズ基金 福岡事務局
〒811-0213 福岡市東区和白丘2-2-75
福岡和白病院 総務課内

Friends Without A Border
1123 Broadway, Suite 1210
NewYork, NY10010 USA
Tel : 212-691-0909
Fax : 212-337-8052

Angkor Hospital for Children
PO Box 50, SiemReap, Cambodia
Tel : 063-963-409
Fax : 063-760-452